かも人名をきれいに配列することは、実に繁雑で困難である。このように詳細多岐な系図の組版がいかに困難なものかは想像するに余りがある。また尊卑分脈を利用したとき誰しも感ずることであるが、大規模な系図であるために系線が多くの頁にわたつて延々と続き、父子の関係をたどるのに手間どることがある。本書ではそのような不便を除くために、系線の右端に父の名を注記してくれている。まことに至れり尽せりである。本書はその学界にたいする深甚な貢献によつて、文部省の研究成果刊行費補助金の交付をうけた。

最後に、幾多の隘路を克服してこのように立派な定本を提供された国史大系編修会および出版関係者に敬意を表すると共に、残る第三篇と別巻索引の刊行が一日も早く実現することを切望しつつ、拙い紹介を終える。

（第二篇　B5判　五四八頁　昭和三十四年三月　吉川弘文館発行　定価二、七〇〇円）

（戸田芳実）

日本城郭協会編　日本城郭全集

近年の城ブームがどのような動機でおこつて来たかは知らないが、工場の煙突の向うに天守閣がそびえる景観もまんざらではない。イギリスのドーバアーの白堊の崖の下に列ぶフラットの屋根から、ローマ時代以降そびえて来た名城をながめた印象を忘れることが出来ない。日本ラインと犬山城、湖畔にそびゆる彦根城、城はまた歴史の国日本がもつ文化財でもある。

だが一先ずその学問的研究はとなると、そんな生やさしくロマンチックなものではない。従来とも日本では城の研究は建築史家により行われてきたほか、城といえば大類伸や鳥羽正雄等の歴史家もまた関心をもつて来た。一方城と切り離せない城下町の研究また故小野均その他の歴史家、それに一部の地理学者もこれを封建時代の地方都市という観点から取扱つて来た。本書はコロタイプの城の写真を主にし、内容の解説や資料の一覧を従にした一般向きの美術全集式のいわば図録集ではあるが、それにしても内容構成は極めて学問的であつて、今はなき明治初年撮影当時の古い写真が数多く収録されていて、各巻八―九〇〇円程度の高価さを補つている。大類、鳥羽等歴史家のほか田辺泰、岸田日出力藤島亥治郎等の建築史家の監修になり全十巻中、一巻を古写真、資料編に、他の二巻を上世・中世の城、及び近世の城、概論に分けるほか九州、四国、近畿、中部、関東、東北、北海道と地方別に七巻に分けている。既に数冊出版されており、解説では各城の遺構、沿革、築城、構造の順に城そのものの特徴を述べるが、その間に古い絵図を現地形図と対比させ、また写真中でもこのことに意を用いているのが注意をそそる。ただ欲をいえば幕藩時代に既に廃城になつたもの等をも地方毎に収録してほしかつたし、もう少しメンバー中に歴史家のウェイトをおき一歩広めて旧城下町全体の景観の復原を試みてほしかつたと思う。

（各巻B4版　一九六〇年　日本城郭協会出版部発行　平均八五〇円）

（藤岡謙二郎）